

2020 年度

WAVOC 主催オンラインセミナー

「コロナ禍を生きる社会問題、コロナ禍でやるボランティア」

第 3 回 「ホームレス」



## ゲスト・モデレーターのご紹介

### ゲストスピーカー：清野賢司さん（NPO 法人 TENOHASI 事務局長）

都内中学校の社会科教員として働いていたところ、2002年に東京都東村山市で起きた中学生によるホームレス暴行死事件に衝撃を覚え、2004年から総合学習で「ホームレス」問題の授業を行う。2017年に退職し、NPO 法人 TENOHASI 事務局長としてホームレス支援活動を開始する。

### モデレーター：二文字屋脩（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター講師）

専門は社会人類学。研究対象は少数民族ムラブリ（タイ）とホームレス（日本）。現在はそれぞれの人類学的研究を進めつつ、「ボランティア×人類学」のあり方を模索しながら、人類学の知見を応用したボランティア教育を実践している。担当する早稲田ボランティアプロジェクトは、「もりびとプロジェクト：ムラブリに学ぶ、世界の始まり」と「トーキョーサバイバー」

**WAVOC 主催オンラインセミナー**  
**「コロナ禍を生きる社会問題、コロナ禍でやるボランティア」**  
**第3回「ホームレス」**

2020年10月17日(土) 13:00-14:30

二文字屋脩

**報告(文字起こし)**

**二文字屋** : では、時間となりましたので、セミナーを開始させていただきたいと思います。

まずは、私のほうから簡単に、きょうの内容の背景を皆さんと共有し、その後、池袋を中心にホームレス支援を行っている NPO 法人 TENOHASI の事務局長である清野さんからホームレス支援の最前線と現状についてご報告いただきながら、私たちはどのようなことができるのかについて皆さんと考えていきたいと思っています。

本題に入る前に、まず私の方からコロナ禍によるホームレスを取り巻く状況について簡単に共有します。

早速ですが、この数字、何の数字かお分かりになるでしょうか。3,992 です。これは、厚生労働省がことし4月に発表した2020年1月現在の全国のホームレス数です。

この調査は、いわゆるホームレス自立支援法というものが制定された翌年の2003年から始まりました。当初の調査結果が25,000人ほどだったということを考えると、この20年弱でその数は大幅に減ったということが分かるかと思います。

確かに2000年代前半に比べると支援現場においてもその数が大きく減っているということは実感されています。しかし問題は、厚生労働省による調査結果というものがどこまで実態を反映しているのかということです。

というのも、この調査、昼間に行われているわけですが、実際に路上生活者の多くは公園であるとか図書館であるとか日中はいろんな場所で時間を過ごしているのです。そのような人たちがカウントから漏れている可能性が大いにあります。実際にある民間団体が東京の幾つかの地域を対象に夜間調査をしたところ、その数は行政の発表よりも2倍以上多かったと報告しています。

一方、こうした数は路上生活者の数です。実際、2002年に制定されたいわゆるホームレス自立支援法の第2条にはホームレスが次のように定義されています。「都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を故なく起居の場所とし、日常生活を営んでいる者」。

私たちが普段「ホームレス」という言葉を見聞きするときにイメージするのは、路上生活をしている方たちだと思いますが、ホームレスを路上生活者に限定する用法というのは世界的に見るとマイナーなほうです。

例えば、欧米では路上生活者だけでなく、不安定な居住形態にある状態の人たち全般をホームレス状態にある人たちと定義しています。この定義を日本にも適用すると、いわゆ

るネットカフェ難民であるとかマクドナルド難民、さらには失業などで家賃が払えずに家を失う可能性がある人たちも含まれます。

もちろん、どちらが正しいという話ではありませんが、コロナ禍で社会の不安定さや脆弱さというものが図らずも露呈してしまった今、ホームレスという言葉が路上生活者に限定せずに捉えたほうが見えてくる現実があるように思います。

実際に仕事を失ったから、あるいは、住居を失ったからといってすぐに路上生活が始まるわけではありません。貯金を切り崩したり、知人あるいは友人宅に身を寄せながら、仕事が見つからずに心身ともに疲弊していった、最終的に路上へと至る。そして、路上生活化すると、それまで失ったものを一気に手に入れるということ、つまり社会復帰をすることは構造的に難しいのが今の日本社会です。つまり、ホームレス問題の解決には、この路上生活へと至るプロセスを視野に入れて対策なりを取る必要があるということになります。ホームレスを路上生活者に限定してしまうことでこのプロセスが見えづらくなってしまっています。

こうした中、コロナ禍というのは、広い意味でのホームレスが決して他人事ではない、私たちのすぐそばに横たわっている問題であるということを露わにしたと思います。

例えば、東京都だけでも約 4,000 人いるとされているネットカフェ難民というのは緊急事態宣言によってネットカフェの営業自粛とかがあってネットカフェを利用できなくなりました。

こうした人たちを対象に東京都はビジネスホテルの一室を提供する対策を取りました。ホテル利用期間というのは延長されたものの、それまでに生活保護制度などを利用しなかった、あるいはできなかった人たちの行方というのは明らかにされていません。

そして、それはホームレスという言葉でイメージされていた単身の中年男性だけでなく若者にも大きな影響を及ぼしています。また、非正規雇用者を中心に雇い止めが起きたり、8月の完全失業率は3.0%となって完全失業者は200万人を超えたとも報道されています。

失業者のうち、多くが非労働力人口化した、つまり再就職を見込めないために求職活動を行っていないことから失業者になってないなど、数字をどう読むかという話がありますが、重要な生活基盤の一つである仕事とまたそこで発生する賃金を得ることのできない人たちは確実に増え、また、今後も増えていくことが予想されています。つまり、仕事を失い、家族や知人にも頼れず、貯金も底を突いて住居を失っていくという人は何も特殊な人ではないということです。私たちのすぐ近くにいる普通の人たちです。

確かに行政も全く何もしてないわけではありませんが、セーフティネットにも引っ掛からない人たちというのも現実にはいます。そうしたにつちもさちもいなくなった人たちが最終的に路上で出会うというのが支援団体です。

そこで、きょうは、池袋を中心にホームレス支援を行っている TENOHASI という NPO 法人の事務局長である清野さんをお招きして、コロナ禍の前後でホームレス支援がどのように変わってきたのかについてご報告いただきながら、今後、私たちができることを皆さ

んと一緒に考えていきたいと考えています。

それでは、清野さん、よろしくお願いいたします。

**清野**：では、よろしくお願いいたします。

私たち NPO・TENOHASI というのは 2003 年に結成された池袋のローカル団体です。その頃ですと、バブルが崩壊してから 10 年目ぐらいで、さっきのパワポにもあったように、ものすごい数の人たちが東京中の公園であるとか路上であるとか、池袋だと、首都高があって、その高架下であるとか、そういった所に寝泊まりして、そして、今よりもずっと差別も強く、役所の扱いも冷たく、路上でばたばたと、新宿でも池袋でも毎月 2~3 人亡くなっているという状態でした。

それから十何年たちまして、今年がかなり大きな変化の年になりました。緊急事態宣言が出た 4 月の頭でしたけども、月 2 回、炊き出しを池袋のサンシャイン 60 の隣の公園でやっているんですけども、緊急事態、そして、小池都知事がネカフェ休業要請ということで、これは大変なことになると思ったんです。その前から私たち支援団体が連合で都庁に行って申し入れをしたりして、とにかくネカフェの休業、そして仕事もなくなったら、ものすごい数の人が路上に吐き出されて、その方々がステイホームできないと。そもそもステイできるホームがない状況なんだからどうかしてほしいと。

一つ、提案したのが、オリンピックも中止になって、多くの宿泊施設がお客さんが入らなくて困っている、そこに公費で家がない人を泊めれば、全て、コロナも防げるし、困っている人も助かるし、そして、宿泊施設も売り上げが入って助かるし、全部でウィンウィンなんじゃないですかという話をして。でも、実際のところ、やんないかなと思ったら、やったわけです、東京都が。

その時のそれを始めたっていうニュースを聞いて、炊き出しの公園にスタッフがこういう紙を出して、今まで相談に来たことがないような人たちがこれを見て相談に来たらすぐネカフェにいられなくなった人を役所につなげてビジネスホテルにつなげようということをやっていました。

そうしますと、今でもよく覚えていますけども、見たことのない若い人が公園をうろろしているんです。とても所在なげに。どうしたらいいんだろうっていうふうでした。なので、「お困りですか。相談に乗りますよ」って言ったら、「ここでいいんですか」と。「仕事もなくて、明日からネットカフェも休むっていうんでどうしようかと思って必死にネットで検索したら、きょう、炊き出しがあるんで、来ました」と。

「ここで相談して駄目だったら、これは死ぬしかないと思っていました」ということでお話を伺いました。

これから幾つか事例をお話ししますが、個人情報保護のためにかなり手を入れています。何人かの分をミックスして語りますので。でも、一つのお話ではありますけども、こういう人たちがいるっていうことで聞いていただければと思います。

40代の方です。もともとは機械メーカーで働いていたんですけども、結構、ブラックな職場だったそうで、不景気になって人員が削減されてサービス残業がどんどん増えていった。これは無理だと思って退職して、一回、失業保険で職業訓練を受けて資格を取ってまた就職したんだけど、その会社が倒産しちゃったと。もう一回、仕事探したんだけど、かなりの人、今、腰痛がある人多いですね。無理して働いて腰痛になっちゃったと。それで仕事就こうにも仕事が決まらなくて、アパートの家賃がいよいよ払えなくなりそうだ。

そうしたら、真面目な人が多いんです。2~3カ月滞納してもどうにかなるんだけど、迷惑掛かるからと思って、自分から「来月、家賃払えないので、今月で出ます」と言ってそこを出て、自分からアパートを出て、そこからはネカフェ生活です。

日雇いでいろんな仕事したって言っていました。引っ越し、事務所の移転、あと倉庫の中の仕分け、ピッキング。やって、どうにかもう一回アパートに行こうとしたんだけど、仕事はあるんだけど、しかしアパートに行くほどのお金はたまらない。

でも、とりあえず仕事があるからこれで食っていければと思ったら、2月になって、どうも変な病気が流行っているらしい。3月になって仕事がガクッと減ってしまった。中国から荷物が来なくなったそうです。緊急事態宣言で、もうこれで安く泊まれるネカフェもなくなってジ・エンドと。死ぬか、それとも他に方法があるのかと思って、私たちのところに初めて来たということでした。

お話を聞いて、その方は翌日、われわれが同行して東京都が用意したビジネスホテルのほうに入られました。しかし、仕事がなかったので、生活保護に切り替えて、今はアパートで生活しています。そのアパートの準備も結構大変だったんですけども、どうにか、アパート、生活保護で入られて、今、仕事を探している最中ですが、相変わらず仕事はなかなか見つからない。

もちろん短期の仕事とかだったらなくはないんですけども、ケースワーカーも本人も、ちゃんと社会保険があつて長く続けられる仕事をじっくり探しましょうとなると、これがほとんどない。40代の男性は、資格はあるけどもなかなかオールマイティーな資格ではないので苦戦されています。今は早くコロナが終息して仕事が出るのを待つという感じでした。

そんな感じで、今までわれわれが会ってこなかったような方々が非常に多く見られるようになったことがあります。私たちがずっと接してきた方というのは、いわゆる路上のおっちゃんと言われているタイプの人たちです。

もともと低学歴で、若い頃から社会に出て、肉体労働に従事して。でも、アパートとかなかなか住めないで、山谷とかの簡易宿泊所、ドヤっていう所で寝泊まりしながら働くというタイプの人たちでした。

何の社会的な保障もない。その代わりに、どこ行ってもいいという自由はあった。しかし、本人たちにとくに自由はない。

選択の自由はなくて、そこでどうにか日本の高度経済成長を支えて、年取ったら仕事がなくなってホームレスになっちゃったという方々でした。そういった方々は、先ほど二文字屋先生がお示しになったような形でだんだん人数は減ってきています。

よくいろんな人から「清野さん、今、ホームレスの人は減っていますか。増えていますか」と聞かれます。皆さん、大体、増えているんじゃないかという、そういった答えを期待されて質問されているんですけども、明らかに路上で寝ている人というのは今減っています。

減っている理由は幾つかありますけども、一つは、生活保護とかが前よりは受けやすくなった。もうリーマンショックの前、10年前ぐらいは、どこの役所行っても、私ぐらいの50代だと、65歳までは働けるはずだと。可働年齢層だと。男なら仕事あるでしょうと言われる。だから、当然、働ける人は働いてもらわないと困りますという感じで追い返されるというのが通例でした。

よっぽど病気があるとか障害があるとかじゃないと生活困難を認められず、また65歳を過ぎても役所から冷たい対応をされて、みんな諦めて帰ってくる。または、どうにか保護を受けられても行かされる場所がろくな所じゃない。

よく、皆さん、タコ部屋っておっしゃいますけども、見ず知らずの人が2人部屋とか4人部屋とか、果ては20人部屋とか、ほぼ収容所みたいな所に入れられて、飯は出るけど、本当ろくなものではない場所があります。

その代わり料金が高い。生活保護費が大体12万円ぐらい出るとして、寮に払うお金が安くて9万円、高いと11万円ぐらい。手元に残るお金がよくて3万円。ひどい所だと、取られる所だと1万円ぐらいしか残らない。

まずはそういう所に入れられて、しばらく様子を見させてもらいますと言われます。本人がアパート生活を望んでも、どんな人か分からないから、アパート暮らしできるかどうか分からないから、しばらくここで我慢して、ちゃんとできるところを見せてくださいと。

あるケースではこう言われました。「そこで根性見せろ」って。意味が分からないですよ。そこで、何ていうかな、我慢できるということをやって、その試験に合格したら初めてアパートに行かせてあげると。

そういう運用がなされてきて、今も続いているんですけども、そういったこともあって多くの方が生活保護は嫌だと言って路上にとどまっていたんですが、多少、そういったことがリーマンショックを機に緩和されてきたということもあります。

とりあえず私たちが一緒に行けば保護を拒否されるっていうことはまずなくなってきた、それが本来の生活保護法の趣旨なんですけども、ちょっとは運用が改善されたかなという印象です。あと、もう一つは、居場所が次々に削られていったということがあります。

池袋の駅でも、前は、皆さん、池袋の駅、分かりますか。西口に東武があつて東口に西武があるという複雑な逆転現象なんですけども、そのデパートの下で寝泊まりすることはなんとなく黙認されていたんですね。

ところが、リーマンショックを機に警備が厳しくなって、まず西武側が、夜は一切警備員が寝泊まりを認めないとなりました。明け方はまだお目こぼしされている部分があるんですけども、次に東武側が認めなくなった。駅の周りにあった公園も次々に改修されて、西口公園とか南池袋公園とか、もう一切、そういう寝泊まりができないような構造に変えていったし、あと、あちこちにあったちょっとしたエアポケットみたいな場所も次々につぶされていった。

ちょうどいい軒下で寝られるような場所に、例えばフェンスが張られたり、ばかでっかいプランターが置かれたり、またはちょっと座れるような場所にわざわざ針みたいなのが植えられたりと。

そういった形で、いられる場所がどんどん減って行って、特に豊島区の公園は、都市の陰影をなくして、どこもぴかぴかの、でもとつてもいづらい場所にするという、そういった傾向がありましたね。今もやっていますけど。

ということで、どんどん居場所がなくなって行って、そして、その仕上げがオリンピックだったと思います。オリンピックに向けて東京中で再開発が進み、その過程で、よく言われる話ですけど、たくさんの路上生活者がいた渋谷の宮下公園は、全て取り壊されてビルができて、屋上にミヤシタパークができた。そこにいた人たちは、全員、何らかの形で追い出された。いられなくなった。そういったことが進んでいきました。だから、そもそもいられなくなったので、困っても路上でとりあえず寝るという選択肢がどんどん狭められていったという部分があります。

そんな感じで前からいたような路上生活者がいなくなったし、いさせられなくなったし、また亡くなった方もかなりいます。ホームレスの人の寿命というのはとても短いと世界的に統計が出ています。

それでも、私たちの炊き出しに来る人たちが、リーマンショックの直後は 330 人平均でしたけども、去年、やっと 160 人ぐらいになってほぼ半分になった。これで来年はもっと減って、だんだん減って行って 100 人切るようになったら随分楽だなと思っていたところに来たのが、今回のコロナだったという感じです。

私たち自身は池袋のローカル団体なので、もともとそんなにたくさんの相談を受けるといった感じではないんです。とにかく池袋まで相談に来た人は相談に乗るっていう形なので。ここ数年は、1カ月の相談者数、新しく生活相談に来る人というのが大体月に 10 人前後だったんですね。

今、グラフをお見せします。これが今年と去年の生活相談、炊き出し、あと毎週やっている夜回り、あと電話とかで相談に来た人の比較なんですけども、緑が去年の 1 カ月、各月の相談者数です。

大体、多くて 4 月で 12~13 人ぐらい。4 月、5 月ね。あとは、10 人か、それを切るぐらいの人数で、そういった方々の相談に乗って、生活保護の申請であるとかお仕事の紹介であるとか、そういうことをやってきたのが私たちなんです。



ところが、ご覧のとおり、4月にまず巨大な波がやってきました。36人ぐらいかな、確か。5月も同様で、それが6月、7月、8月とちょっと落ち着いてきたけども、相変わらず例年の2倍から3倍と。

でも、私たちの所はまだましなほうで、弁護士さんとか労組の関係の相談は、もう本当に、何百人、何千人という単位ですから、私たちは、本当にいよいよ最後の手段というか、家もなくなっちゃって、首くるかそれともっていうときに一生懸命ネット検索して来るという所なので、まだ家がある、まだ仕事はどうにかつながつているって人はそういう弁護士であるとか労働組合のほうに相談行かれていまするんだと思いますけども、池袋にもちょっとした津波が来た、そういった印象でした。

どんな感じの方が来たかという、今まで私たちに会ってなかったようなネットカフェ難民系の方々が多かったです。これは、次の会報に載せようと思っている原稿の一部なんですけども、先ほどもネットカフェ難民4,000人という推定があったと思います。

あれはあくまで推定で、しかも、その4,000人がずっとネカフェ生活しているわけじゃなくて、常に入れ替わっているんで、人数もその瞬間瞬間の人数でしかなくて流動性が高いってことはぜひご理解いただいたほうがいいと思うんですけども、ただ共通しているのは、結局、ホームレスなんです。不安定居住。自分の家だと主張できる場所がなくて、転々とさまよっている。

ちょっと前まで派遣だったと。あとは刑務所から出たという人もいます。実家にいたんだけども、もともと折り合いが悪くて、また虐待を受けてという人もいるし、児童養護施設の出身の人も異様なくらい割合が高いんですけども、そういった方々が東京に出ればどうにかなるだろうと思って仕事始めたんだけども、安定した仕事なんかちっとも就けない。

もともと非正規の割合が今4割を超えていますから、そうすると、正規職に潜り込むには条件が悪過ぎる。まず、家がない時点でかなりアウトですし、特殊な技能なんか皆さん持っていません。持っていれば、とっくに、それこそ資格があれば何かしら就職できているので。

困窮しているうちに身分証落としちゃったっていう人もいますね。携帯電話も滞納で失ったと。今の社会、写真付きの身分証と携帯電話がない人は人間ではありません。仕事に就けません。人間扱いされません。警備とか建築現場でもその2つがないと仕事がない。または、あっても非常にブラックな仕事しか与えられないということがあります。

なんですけども、ただその方々もホームレスは嫌なんです。自分たちはあいつらとは違うという意識を持っている人はかなりいて、それがかろうじて最後のプライドみたいなところがある人も結構いて、そういうホームレスに対する偏見、差別が深くご自分の中にも内在されているという方はいっぱいいて、あと単純にそういう人たちと接したことがないから怖いと。

ある人は、いよいよ野宿するしかないと思って公園に行ったんだけども、ホームレスがいっぱいいて怖かったんで、見えないように陰で寝たと。「あなたもホームレスです」って

言ったら、「そうですか」みたいな感じで、すごい嫌な顔をされました。

ですから、支援団体の炊き出しとかもそういった人たちはあまり来なかったんです。ご飯1食、または、私たちの所で衣類も医療もちろん生活の相談もできるんだけど、しかしそこに並ぶのは怖いという人たちがいっぱいいて。

でも、最初にお話ししたように、そういった方々がもういよいよ困って、われわれの所、ホームレス支援団体っていう所に電話をかけた。すごい勇気だったと思います、それは。いろんな方がいらっしゃいました。ちょっと読んでみましょうかね。

親から虐待を受けてきた、高校中退して東京に出てきた、アパート借りられると思ったんだけど、建設の仕事もしていたけど、アパート借りるには保証人が必要ですと言われて、仕方なく寮とかネカフェ暮らしをして。

寮というのは、派遣の寮だったり、あと建築現場の飯場といわれる宿泊所のことです。会社の寮に泊まりながらの長期契約の場合もありますし、よくあるのは、手配師という路上のリクルーターに声を掛けられて、2週間満期で仕事行って、終わったらまた別の所に2週間満期で行くとか、そういった労働形態で、それをやる人が多いんですけども、とにかく仕事はあったと。選べるぐらいあったそうです。昼間も働く。

その人は頑張ったので、日勤、夜勤、しょっちゅうやっていて、アパート借りようと思って頑張って貯金していました。2月まではオリンピック景気だった。ところが、コロナで仕事が壊滅。

これでネカフェ閉まったら死ぬしかないです、と言った人とかもいます。

その人なんかはご本人も虐待の経験がありましたが、その他にかなりいるのは発達障害系を抱えていると思われる方ですね。子どもの頃から人間関係がうまくつくれなくて友達がいなかったと。高校出てスーパーとか流通で働いていたんだけど、若い頃はまだどうにか体力もあって頑張れたんだけど、つらくなって辞めてからはもう正社員の仕事はとでも就けず、実家を出たらもうアパートも借りられず、日雇いのバイトでネットカフェ生活、お金がないときは野宿と。ネットカフェ生活の人たちもかなりの割合で金がないと野宿と。やったことあると。

その中でホームレスの人と仲良くなるようなコミュニケーション能力高い人もいるんですけども、それは多数派ではなくて、むしろ一人でじっと耐えて仕事をじっと探すというタイプが多いですね。

あと、女性のケースですけども、10代で結婚して家に入ろうとしたんだけど、夫のDVで家出したと。夜の仕事で働いていたんだけど、コロナで店が休業しちゃってネカフェもいられなくなったと。風俗系の方もそれなりにいらっしゃいました。私たちの所にはそんな来てない感じですけど。

あと、多いのは刑余者。刑務所を出た。協力事業主とかがいて、そういった人たちを雇用する所もあるんですけども、そこも厳しかったりとか、そもそも仕事がなかったりとか。前、どこだったっけな、福島かどっかで出所した人が地元のそういう相談所に行ったら、

「ここに行きなさい」と言われて、東京までの電車賃と TENOHASI の電話番号渡されて来たということがありました。

そんな感じで刑務所を出た刑余者の問題って非常に大きいんですけども、とにかくその人は建設関係の仕事を見つけて、生活保護を一回受けたけども、それは切ったと。でも、今回の影響で、コロナで、どこだったっけ、その人は清水だったかな、下請けでやったんだけども、ゼネコンが仕事を一回止めたので、蓄えも尽きて相談に来たと。

そんなこんなで、本当にさまざまな背景を持った人たちが来ました。

ただ、一つ言えることは、ネットカフェ難民は、ちょっと仕事があればもう一回普通の暮らしに戻れるかということ実はそうじゃなくて、コロナで初めて困窮したわけじゃなくて、その前から困窮している。

当たり前ですよ。ネカフェに寝泊まりしているということ自体が異常で、要するに、みんな、朝になったらネカフェを出て荷物を持って仕事に行って、また夜になったらネカフェに戻って1泊分のお金を払って寝ると。そういった暮らしです。

ある意味、日雇い労働者のほうがまだマシかもしれません。ドヤは、ずっといられますから。荷物を置いておけますから。荷物が多い人は、コインロッカーに荷物を預けてロッカー代も払いながらネカフェ代も払ってという方は結構いらっしゃるんです。

そこに至るにはさまざまな原因があって、障害の問題も家庭の問題も、あとブラック企業で働いていて結局うつ病になっちゃってとか、体おかしくしてっていうような方もいっぱいいらっしゃいました。

ですから、一人一人、個別の生きづらさを抱えているので、単にコロナをしのげばまた元に戻れるという問題ではないんだなっていうことがやればやるほど分かってきた。そういう感じです。

あと、生活保護に対する嫌悪感っていうのは結構あって、あるケースワーカーによれば、生活保護に人が殺到するかと思ったが、ある役所ではそうでもなくて、6月なんかは前年より保護申請数が下回ったそうです。給付金、住居だとか緊急一時とか福祉貸付とか、そちらにはものすごい数来たんだけども、生活保護にあんまり来なかったと言っていました。

私の知っている方も生活保護だけはどうか受けたくないと言ってきたんですけども、泣く泣く諦めて生活保護を受けたっていう人もいましたし、生活保護に行く前にどうか自分で頑張りたいという人は、仕事がある人は、東京都にチャレンジネットというのもあるって、そこだと、3カ月、最初4カ月間は無料でアパートを提供してくれて、その間にお金ためなさいよっていうことなんですけども、これほど仕事がない状況では4カ月無料で住居を提供されてもなかなかアパートを借りられるだけのお金はたまらないだろうなど。そうすると、自動的に生活保護になるんだろうっていう感じになります。

あと、最近、多いのは、給料未払い、または、どうか仕事はしているんだけども、次の給料日までお金が持たなくて、ちょっとつなぎのお金を貸してもらえませんかという感じで来る方です。そういう方々、私たちが接している方々は本当に氷山の一角、ごく一部

だと思っんです。ものすごい数の方々が本当はいます。

あと、もう一つ、飲食店とかもどんどん廃業されていると思っんですけども、そういう方々の相談って意外と私たちの所に来ないので、別の所に行っているんだと思っんですけど、そういうような状況が、どんどん大量の失業者を生み、仕事を失った方々が今、町にあふれているんだらうなと思っます。

ボランティアに関しては、後で質問していただければいいと思っんですけども、コロナをわれわれが広げない、われわれボランティア側にも広がらないようにするということで、今、前はみんなでわいわい言いながらあったかい汁物作って、野菜たっぷりの汁物作って、それをご飯にかけてかき込むという、そういうタイプの炊き出しを月2回やってきたんですけども、特に作るほうの主力はリタイアした年代のお姉さま方が多いので、これは危険であると。

食べるほうも、公園なんですけど、みんなでふーふー言いながらおしゃべりしながら食べるという、とても牧歌的な景色だったんですけども、それも危ないということで、それは今停止しています。

どうしようかといういろいろ考えたんですけども、自分たちで作れないので、今はお弁当屋さんをお願いして、この前は220食かな、注文して、それを配る。並ぶ人は、密にならないように、公園の地面に割り箸を置いて、2メートル間隔で、その割り箸を目印に並んでください。おしゃべりしないでください。そして、動くときも割り箸を見て必ず2メートルをキープしてください。受け取る時は消毒してください。もらったら、公園で食わずにどっかに散って一人で食べてくださいと。そういうとても味気ないものになっておりますけども、しばらくは仕方がないと思っています。残念ながら、今の弁当のほうがうまいとか言う心ない人もいまして、とても、はいはいって感じなんですけど。

あと、ボランティアについては、実は、そちらもあらかじめ登録制にして、毎回、人数絞ってやっているんですけども、この間、いろんなことがあって、例えば「失業しているんでボランティア体験したいです」とか、学生さんでも「いろんな人たちが苦しんでいるので、少しでも現場に立ちたい」というような申し込みが相次いでいて、いつとき、新規のボランティアさん、一切、断ったんですけども、今は、人数限定、1回4人までは新しい方を受け付けましょうっていうことでお申込みいただいています。実は、やりたいっていう方は結構いらして、毎回「すいません。もう4人定員達しましたので、次回、お願いします」とお断りしている状況です。

そういうことで、ボランティアに対する関心も高まっている方向なのかなと思っますが、いかんせん昔の和気あいあいとした交流という面を制限せざるを得ないというのはじくじきたるところで、どうにかこれを乗り越えて、この活動を続けつつ、少しでも多くの方々が安定した生活につながれるようにしたいなと思っております。

最後に、ちょっと部外秘のものをお示しします。

私たち、毎回、いつどんな方が相談に来られて、つまり炊き出しなのか夜回りなのか、

そして、プロフィールを伺って、その後、どうなったかと。そしてどういう支援をしたかってことを記録に取っています。

4月に相談された方、35歳、29歳、28歳、46歳、47歳、55歳、37歳、45歳。本当に若い方が多くて、そして、ちょっと見せられませんが、一番端っこのほうに、その人のプロフィール、なぜ困窮したのか、どういう背景があるのか、そして、今、どういうことを望んでいるのかということが書かれています。

そして、その後、生活保護になったのか、自立支援とか、他の支援、かなりの人がビジネスホテルに行ったということが示されているんですけども、あと相談のみとか、あとアンブレラ基金という困った人たちのために使ってくださいと基金を各団体共有でつくっているのがありまして、そこから、とりあえずのネカフェ代、ネカフェが閉まっている時期はちょっと金額を上げてビジネスホテル代を支給したかということを書いています。

相談者数が非常に増えたと言いますが、一人一人、年齢も違えば困っている状況も違って、そして、これからも生きていく人たちです。年齢も見てのとおりさまざま。平均は48歳ですけども、下は17歳かな、この前の方は。それから、70代までさまざまで、本当にケースはばらばらなんです。

よく思うんですけど、われわれの生活困窮者とか路上生活者の支援というのは、一つの社会問題から来るんじゃないで、ありとあらゆる日本または世界の社会問題の結果として、たまたま、今、家がない状態になったホームレス状態になった人たちの支援なので、全ての社会問題がつながっている。今いる人たちはその中の一つの属性として家がないというところしか共有点っていうのはないんです。ですから、そこへの支援ということは非常に本当に多くの社会問題に対する知識が必要とされますし、私も日々勉強しています。

もちろん、支援に当たる側は、それを勉強しながら、少しでもいい解決策、または、なかなか解決はしませんが、少なくとも、いい関係を築いて、「うまくいかなかったらまた来てくださいね」と言える、そういった関係をつくって行って、いつか私たちの前から去っていくことを願いながらやっていくしかない、というふうに思っております。ちょっと長くなりましたが、私からは以上です。

**二文字屋**：清野さん、ありがとうございました。時間ちょうどです。質問時間はあと30分ちょっと、多く見て40分ほどあります。参加されている方たちの質疑応答を受けながら議論を深めたり広げたりできればなと思っております。さっそく質問が来ていますのでお答えいただきたいと思います。まず、「相談に見える方の年齢別割合や女性の相談が増えているかなども分かれば教えていただきたいです」ということです。

**清野**：女性は増えました。増えたといっても、今年、今日までの時点で166人の新規の相談者がいて、前は2%ぐらいでしたけども、今は10から15%の間だと思います。でも、20人いないかな。

もともと、ホームレスの人たち、要するにホームレスという、いわゆる狭い意味のホームレスですね。路上生活者における女性の割合は非常に低くて、ずっとなぜなんだろうってことをいろんな人たちが議論していますけども、今回は、かなり多くの不安定就労の方が家を失い、仕事を失い、吐き出されて私たちの所に来るので、そういった方々の相談が結構増えています。

年齢層は、今、40代が一番多いです。40、50、30、20の順かな、確か。でも、50歳未満が今55%ぐらいです、確か。昔だったら20代なんてまずいなかったんですよ。あり得なかった。本当にびっくりするような年齢の人たち。20代、結構、ぼろぼろやると普通にこの表の中にも出てきます。30代、40代。

昔の主力だった55歳以降のいわゆるおっちゃんたちというのは、もちろんいるんです。続いていますけども、それがほとんどだった時代は10年前で、だんだん増えてきて、今年、一気に20代、30代の若い方々の相談が増えたという状況です。聞くと、精神障害を抱えた方というのが多いし、はっきりと障害じゃないけど、子どもの頃から苦勞してきたんだなという方も多いなという印象です。

**二文字屋**：ありがとうございます。ちなみに、先ほど17歳という年齢が出て非常にびっくりしたんですが、その背景というのは極めて特殊なものなのか、あるいは、清野さんとしてはこれからもそういった方たちがちらほら出てきそうな感じなんですか。

**清野**：本来だったら女子高生相談のColabo（\*困難を抱える10代の女性たちを支援する一般社団法人）につながるべき人がこっち来たって感じです。Colaboに行けば、そういった方、家にいられない少女たちというのはいっぱいいると思います。

**二文字屋**：家出少女とか、また異なる形での社会問題も顕在化していますが、まさにコロナ禍でいろんなバックグラウンドであるとか属性をもつ方たちがより可視化されてきたということだと思います。

このことに関連して、「若い方が多いということですが、一番若い方、それが17歳。ちょっと特殊だったと。でも、20代が増えてきたってということですよ。その20代っていうのは、いわゆる失業なり不安定な就労っていうのが多いんじゃないか」という質問が来ています。

**清野**：本当に一言で言えないです。大学行っていた人もいるし、中卒で働いた人もいるし、精神障害で手帳とか持っているけども、親と折り合いが悪くて家出てきたらホームレスになっちゃったという人もいるし、なぜこの人はこんな生きづらいのかなというよく分からないようなタイプもいます。

**二文字屋**：逆を返せば、これまでホームレスの調査でも年齢ってというのは一つの重要な基準として考えられてきたわけですが、年齢といったようなものでは一概に語れないという状況がますます増えてきたということでもあるかと思います。

では、他の質問に行きたいと思います。アメリカのカリフォルニア州に留学中という方です。「地元の地域はホームレスがとても多く、その主な原因として、アメリカの医療システム、麻薬中毒、メンタルヘルスということが思われますけれども、日本の場合は社会的な原因はどのようなことだと考えられますか」という質問です。ちなみに、日本とアメリカのホームレスのそもそもの成立背景が大きく異なるというのはよくいわれてきたことで、アメリカでは特に退役軍人の方たちも一定層います。また、昨今、人種差別の問題がまた浮き彫りになってきていますが、都市部における非白人青年の人たちのホームレス化というのも慢性的に多いということは昔から言われています。その中で日本の場合は社会的な要因としてどのようなことを考えられますかという質問かと思います。

**清野**：そこは二文字屋さんがご専門じゃないでしょうか。

**二文字屋**：いやいや。清野さんがおっしゃったような社会的な原因についてお聞きしたいということなので、失業とかは一回置いといて、特に家庭内の問題ってというのは非常に多いですね。また、清野さんが以前一緒に活動されている精神科医の方が調査されたデータについても少しお話ししたいかと思います。

**清野**：障がいがある背景にあるのは非常に高い率で、一般の社会とは異なる部分があると思います。10年ぐらい前に池袋の路上生活者に対して大規模な調査を行ったことがありまして、その時に、精神障害の疑いのある人が約4割、知的障害の疑いのある人は約3割ということで、多くの障害者が路上に放置されています。ただ、障害といっても、路上生活を継続できるだけのスキルはあるということなので、いわゆるボーダーなんです。ボーダーの人たちが適切な資源に結びつかず、または現代の非常に厳しい労働環境に晒される。

例えば、昔だったらば、はっきり言って穴掘っていけば金がもらえたとか店番してればどうにか飯が食えたみたいなことがあります。それがどんどん労働者に求められるスキルが高くなって、裸一貫、体が資本だ、みたいなことが言われなくなって、体だけじゃ資本にならないと。より高いスキルが必要だと。

例えば、コンビニの店員なんか大変だと思いますよね。ああいったのは、できる人はいいんですけども、できない人、今でいえばADHDだとかアスペルガーだとか、そういった障がいに名前がつくような人。昔はそれが障がいじゃなかった時代があった。それでも社会で普通に食えた時代があったけども、今、それが非常に厳しくて、それこそ早稲田行っても就職してうまくいかなくなってみたい人はいっぱいいると思うんですけども、そういった、社会が高度化されていったということがあります。

そういった人たちが仕事もできず、そして、家族の支援が受けられればいいんですけども、親も貧困である、貧困が遺伝しているとか、またもう虐待されていたとか、そういったことになる、なかなか支援も受けられず路上生活になっていったということは、ずっと前から分かっていたことです。それが今の若い人たちの中にも顕在化してきた。そして、いろんな経緯を経て家を失ってネットカフェ生活になっていったと。そして、そこから再挑戦できるような社会でなくなってきているというのが現状だと思います。

**二文字屋**：ありがとうございます。次の質問に行きたいと思います。「現時点でホームレス支援制度の不備は感じますか」という質問です。

**清野**：何をもちえて支援制度と言うかというのもなかなか議論になるんですけども、制度的なことはぜひ大学の先生とかにやっていただいて、私の実感では、一番大きなことは、日本における貧困に陥った人たちに対する冷たい態度が気になります。

社会ではどこでもあると思うんですけども、福祉事務所に行っても、人によりますけども、私ぐらいの年齢の人が「生活保護受けたいんですけど」って言うと、ほとんど泥棒を見るような冷たい目で、「何であんたはそんなことを言い出すんだ」と。「どうにかならんのか。働かないのか」と。「怠けをしているんじゃないか。税金、泥棒しようとしているんじゃないか」と。

私からすれば困っている人を助けるのがあんたの仕事で、それをちゃんとやらないあんたのほうがよっぽど税金泥棒だと思うんですが。

だから、細かい制度設計はさまざま議論があつて、良くなっている部分もちろんあるんです。あるし、宿泊所はだんだん個室化が進んでいるとか、歓迎すべき点もいっぱいあるんですけども、現場に残っているのは、まず助けようよじゃなくて、まず疑おうよと。まず、生活保護の不正受給を防ごうよと。保護の人数を減らしましょうよという。そこが優先されているような現場が多いです。

一律じゃありませんよ。本当に一つ一つの福祉事務所は一人一人の職員によるんですけども、多くの方が今も路上生活を継続することを選んでるのは、昔、そういうことで冷たい扱いを受けて「だったら、いいよ」と。

誇り高い人たちのほうがむしろ路上生活を選択するということがあつて、そこは簡単に制度うんぬんではないですね。日本社会全体がそうなので、そこをちょっとずつ私たちはこうやって皆さんに聞いていただくことで岩盤をちょっとずつ崩していく、そういったイメージであります。

**二文字屋**：ありがとうございます。2002年にできた、いわゆる「ホームレス自立支援法」で一つ国が大きな一歩を踏み出しました。ただ制度的な不備もいろいろ指摘されているのが現状です。それは、時間の関係上、お話しすることができませんが、ホームレスに特



化したものではないですけども、2015年に生活困窮者自立支援法っていうのができました。いわゆる高齢者であるとか障がい者であるとか、そういった従来の分野ごとの枠組みでは対応し切れない、ひきこもりであるとか貧困にある子どもであるとか。その中身は、それこそ住宅確保の給付金事業であるとか就労支援とか、ホームレスに限らないですけども、そういった方たちでも一応利用できる事業が含まれていると思います。それが2015年なので、5年前にできた。そういった新しい制度ができていますが、そういったものの効力というのは、今、清野さんの現場で感じられていますか。

**清野**：生活困窮者自立支援法というのは、ぶっちゃけ生活保護になる前にどうにかしようという制度ですよ。

**二文字屋**：水際作戦みたいな。

**清野**：そうですね。水際作戦を制度化して、その前の段階のさまざまな手当てをしようということなんですけども、ホームレスになっちゃった人はもう明らかに生活保護の要件を満たしている。金がない、仕事もない、助けてくれる人もいない、生活保護しかないだろうっていう状況なんです。

だから、今まで、私たち、住居確保とか福祉貸付とか、チャレンジネットすらほとんどご縁がなかったです。そういった方々は独自に自分たちでやっていたんですね。今回、初めてそういった制度とつながる人たちも支援するようになって、「ああ、こうなっているのか」みたいなといった部分はありました。

ということで、何ていうかな、自立支援法、困窮者やホームレスも含めて、本当に全てが小出し小出しで、しかも、できる限り税金を使わない方向で進んでいます。でも、かえってそれで救えない人が多くて、ますます必要な支援が増えていくという悪循環に陥っているというのが全体を見た話で、要するに、意識の問題というか、意識が制度を規定しているのも、または有権者の意識が政治家に、そして、それが役所が作る法案なり制度なりに影響していくので。

例えば、今回のネットカフェ難民のためのビジネスホテルも小池都知事がぼーんとぶち上げた割には役所があんまり宣伝しなかったんです。だから、知らないで、わずかに開いているネカフェと路上をずっと往復していたっていう人もいて、「何で？入れたのにどうして使わなかったんですか」って言ったら、「そんなもん、携帯が止まってて、無料Wi-Fiの所でしかネットつなげない私にとってはネットというのは仕事を探すための手段であって、Yahoo!ニュースのトップにずっと出てもない限りはそんなの見逃しちゃう」と。だから、その方が初めて知りましたというのが確か8月だったかな、そんな制度があることを知ったのが。驚愕しましたね。

ですから、横で言ってもしようがない部分はあるんですけども、生活困窮は全て自己責

任である、そして、あいつらは怠けているんだ、そういう意識の下にさまざまな制度が組み立てられている部分があります。

頑張っているお役人もいるし、役所の人もいい人はいっぱいいるんですけども、いかんせん大勢がそれなので、なかなか、不備といえば、細かい話をすればいっぱいあるんですけども、そここのところを変えていくこと、変えていきながら個々の政策や施策を改善させていくことが大事だなというふうに思っています。

**二文字屋**:ありがとうございます。制度という時点で何か対象者を選別するわけですよね。こういった条件がこの制度は当てはまりますよと。しかし、選別というのは、ある意味、排除でもあるわけですから、そうした点で漏れ出てしまう方っていうのは必ずいます。それが、ある種、制度というものに常に付随する問題なんだろうと思います。

そのことと関連して、そこで社会がどう受け止めるかっていうことと関連しますが、参加者の方が「日本は他国に比べても生活保護の受給に対する偏見や精神的障害が高いように思います」とコメントされています。「相談の結果として生活保護申請が存在することにもう一押しというものがなければなかなか申請に踏み出せない人がいるということの表れだと感じました」と。

先ほど清野さんが仰ったように、「俺はホームレスじゃない」というようなプライドとか、ある種、自分なりにホームレスに対する偏見を内面化しているという方たちもいると思いますが、「何が原因でこうした偏見が生じたのか、またこうした偏見をなくすためにはどのような方策が考えられるか、非常に難しい問題ですが、清野さんのお考えを伺いたいです」という質問も来ています。

**清野**: 難しいですね。みんなで考えていきたい。どうしたらいいんですかね、これね。ただ、何だろうな、ちょっと話は違いますが、その一方で、ホームレスは好きでやっているんだろうと。全てを捨てて自由に生きる世捨て人みたいな、そういう都市伝説みたいなロマンを抱く人もいて。いやいや、そんな人、今、いませんよと。ホームレスやりながら芸術だとかやっている人とかもいませんという話もたまにやるんですけども。

やはり日本というのは、何なんだろうね、働かざるもの食うべからずで、人権なり人としての存在は労働または社会への貢献によって初めて担保されるという考えが強い。あと、お上の意識だとか同調圧力の強さだとか。社会、どんどん変わってきているので、良くなったり悪くなったりする部分もありますけど、波はありますけども。

うーん。どうなのかね。でも、昔からこんなに冷たい社会だったのかな。それとも、新自由主義の影響で全ては競争っていうことでそれが強調されているのか。いろんなことを感じますが、これだって処方箋はないです。今、お話、ここに参加して下さっている皆さんと、みんなで考えていって、一人一人、自分の現場でちょっとずつこれを変えていく。そして、ちょっとでも生きやすい世の中にしていく。

よく、日本というのは、女性に対する扱いもそうだけでも、生きづらさも指摘されています。結構、これだけ世界に誇れるトップクラスの国なら、どうしたらもうちょっとこの国やこの社会を良くしていけるんだらうっていうことを考え続けるしかない。

私たちの団体は、とにかく、さまざまな制度があるんだけど、自分はどの制度を使えるのか、どこ行けばいいのか全く分からない人たちに対して、ワンストップのサービスを提供しています。今年は 160 人ぐらいの相談に乗って、半分ぐらいの人を直接支援して、何人かは私たちのアパートに入ってもらって継続的に支援してということをやることによって、世の中に対して、こういう人たちもいますよ、こういう手もありますよ、できればこれを日本の福祉制度に取り入れて、そうするともっと多くの方が安心できますよということ提案していくということをやっていくだけです。

**二文字屋**：ありがとうございます。これは非常に難しい問題というか、ホームレスをめぐる問題だけではない問題、社会全体の非常に根深い問題だと思います。自己責任論といったものが事態をより複雑化していると思います。先ほど清野さんの話にも出てきた、真面目な方というのは自己責任という言葉に敏感であるとも言えます。「生活保護をまだまだ俺は受けたくない」とかは、私自身、路上で調査をしながらもよく聞く話です。しかし、自分一人じゃ解決できないことも多々あるわけですね。

そういった中で、自分で何とかしようという気持ちはすごく尊重するんですけども、こっちもさっちなかないという状態のときに、人に頼りづらい社会というのがホームレス問題を通してよくこの日本社会の一つの特徴として見えてくるのかなと感じています。逆に言えば、頼りやすい社会っていうのはどういった形で実現可能なかっていうのは、ある意味、長い、私たちが考え続けていくべき事柄なんだと思います。

さて、続々と質問が来ましたので、次の質問に行きたいと思います。先ほど質問した方が再度質問してくださってもいますが、新しい方を優先したいと思います。「現在、日本では多くの外国人労働者を受け入れています、当事者たちの過酷な労働環境、困窮生活、失踪なども問題視されていると思います。そうした労働者、技能実習生も路上生活を強いられている状況はあるのでしょうか」。外国人、外国籍を持っている方のホームレス化、路上生活化ということだと思いますが、いかがでしょうか。

**清野**：私たちの所にはほとんど来ないんですね。もっと来るかと思って身構えていたんですけども、そこは謎でして、もっと広く相談を受けている「新型コロナ緊急アクション」とかにはそれなりに外国人の労働者の相談も多いし、あと給付金の窓口にはすごい数の外国人もいらしてますから、困窮が進んでいるのは間違いないし、大変な状況にある方は多いと思うんですけども、私たちの所、ホームレス支援の現場には意外と来てないという印象ですね。

**二文字屋**：ありがとうございます。ちなみにですけど、私、以前、名古屋でいわゆる路上生活者支援やった時に、トヨタがあって、そこでいろんな外国人の方が働いていて、その下請けの下請けとか孫請けとかそういった所で働いている方たちが、数としては非常に少ないですが、相談に来たといったような事例はあります。

続いての質問なのですが、「仕事を探されている最中の方はどのようなことをして生活を送られているのか気になりました。分かる範囲で教えていただければ幸いです。個人的に資格勉強などをするなど有効活用できれば今後に生きるのではないかと考えていますが、現状を知りたいです」と。

これに関連して、既に質問してくださった方も、「コロナ状況が続く中で路上からの脱出を目指すために就職地を増やす、就労スキルの習得支援が必要と思いますが、今はどのような支援があるのですか」と質問されています。内容が近い質問ですので、一緒に読ませていただきました。いかがでしょうか。

**清野**：仕事に関しては、しかし、現実問題としては、まず先ほどもお話ししました多くの方が身分証をもうなくしている、または免許証を失効している、携帯電話は支払いの滞納で止まっている。その状況ではそもそも入り口にも立てないので、まずじゃあそこまで行っちゃったらとりあえず生活保護を受けましょう。そして、携帯電話と身分証、マイナンバーとか復活させましょう。そこから先、通常の就労支援の枠組みで対応します。今は2人ほど、パソコンの研修受けている方がいますね。あと、その他にハローワークとかが提供するさまざまな職業訓練を受けている方もいます。特別、今回に関して特化したというようなケースはないです。

それ以外のスキルアップについては、何ていうかな、できる方はもうやっているんですね。読み書きが実はあやしい、小学校、中学校、ろくに行っていない、そういった方々に、じゃあCAD（\*コンピュータ支援設計）やりましょう、プログラミング覚えましょうって言っても、そもそもとりあえず原付免許受けましょうって言っても、何回もやったけど、受けても取れなかったんで、資格や免許は無理ですというような方々が多いので、そういった方々にとっては通常の何か資格を取って就労というのは結構ハードルが高いのは事実で、ある程度、単純な労働、多いのは倉庫内作業とかですけども、そこがもうちょっと待遇が良くなって続けられるような仕事になるほうが現実的かなと思います。日本の労働者全体の待遇がまずまともなものになっていかないと厳しい。

じゃあ、それをどうしたらいいかっていうことは経済の分野なので何とも言えませんけども、人間らしき労働を、やはり労働者が要求していかないことには誰も提供してくれませんから、労組の運動だとかそういったのを強めていく必要があるんだろうなというふうに思います。

**二文字屋**：ありがとうございます。次に、「社会問題として空き家もあると思うんですが、

その利用策の施策は実際に進んでいるのでしょうか。また、日本は宗教が他国に比べ普及していない社会ですが、現場ではキリスト教や仏教などの宗教的支援はどの程度感じられていますでしょうか」という質問が来ています。質問が 2 つありますね。まず、空き家、先ほどのハウジングファーストの問題とも関連するかと思います。

**清野**：本当に、今、空き家が多くなってきて、地方ではどんどん特に誰も住まないうちが増えてはいるんですけども、私たちは、単純に空き家が多いんだから、それをみなし公営住宅みたいにして行政が一時的に借り上げて家に困っている人たちにそこを提供すれば本当にウィンウィンじゃないの？ということをおっしゃっています。

例えば、豊島区だったら、今、夜間に調べると、路上生活の方が 88 人です。ついこの前の集計結果です。そうしたら、その人たちが住めるように、100 軒ほど、普通の民間アパート、安いのを役所が借りる。100 軒借りるのに、東京だと 1 部屋借りるのに大体初期費用が 25 万ぐらいかかりますから、2,500 万円です。2,500 万ぐらあればとりあえずアパート借りられる。

それを役所が、家がない人、別に路上生活者だけじゃなくて、例えば、前のアパートが取り壊しになっちゃって行き場がない高齢者だとか障がい者だとか、あと母子家庭だとか、そういった方たちにぼんぼん提供して居住の安定を図れば。

その方々が仮に生活保護であっても保護費の金額は変わらないです。寮にいろいろが何しようがほとんど変わらない。その人たちが安定した生活に戻れて人々が幸せになれる。一部の人は、また働き出して納税者になれる。そういったことをやってみましょうよと役所に言っているんですけども、多少、動きはありますけども、住宅は国交省、福祉は厚労省という縦割りでなかなか連携が取れていません。国交省が始めた住宅セーフティネット、これもなかなか効果挙げてないですよ。本当にちょっとずつ補助金もらって誰でも受け入れますよって住宅を確保しようとしていますけども、いかんせん、地元自治体がずっと補助金払い続けるのは嫌だと言って出し渋っている。もちろんどこも金がないのは一緒ですけども、じゃあ何に金かけるかということで、巨大な再開発のほう景気良くなって選挙に勝てると思っているんでしょうね。

なかなかそっちのほうにお金が回らないというのがありまして、これだけ空き家があつてこれだけ家がない人がいるという矛盾した状況は今も続いていて、それをつなごうという政策も確かにありますけども、そこに投じられる資源が非常にまだまだ足りなくて、そこは運動でもって声を上げていくしかない。世論でもって、また選挙でもって、政治、行政を動かしていかないと、というのが現状だと思います。これが空き家ですね。あともう一つ、何でしたっけ。

**二文字屋**：宗教です。現場では、キリスト教系は特にいろんな支援団体をやっていますよね。教会が母体となっている所もありますし、清野さんの TENOHASI ではモスクの方た

ちからの協力もあると思うんで、そうした連携の話を少ししていただければと思います。

**清野**：日本では炊き出しをやっている教会っていうのは非常に多いです。キリスト教の教えの中に、貧しい人たち、わが友であるという教えもありますから、炊き出しをやっている。といっても、教会全体でやっているというよりは、その中の一部の人たちが熱意を持ってやって、一部の方々は冷ややかに見ているという部分もあるそうですけれども、そういったことは多いし、仏教系でも、そういった活動、特に私たちが縁があるのは浄土宗系の若いお坊さんたちの「ひとさじの会」という所が浅草近辺で夜回りをしておにぎりを配ったりとかして支援しております。

あと、モスクも、要するにムスリムの方々もムハンマドの教えの中に貧しい人たちに奉仕しなさいというのがありますので、むしろイスラム圏の国ではそれが制度化されているんだけど、日本ではないので、私たちに炊き出しぜひやらせてくださいと来ます。そうすることによって徳を積みたいという意欲もありまして、さまざまな所が支援活動に参加してくれています。

ただ、それが大きな流れかというとなかなかそうでもなくて、クリスチャンはもともと数少ない。ムスリムはもっと少ない。仏教はあるけど、お寺というのは本来の宗教施設ではなくなっていると。宗教団体ではなくなっているっていう部分も大きいと思うので、個々の動きはあるけども、それが大きな流れになっているかというとなかなか難しいかなというのが現状です。

**二文字屋**：ありがとうございます。WAVOCの兵藤先生からも質問が来ています。「DV被害者とかの研究もされている先生ですが、「ホームレスを自分が偏見を内面化して認められない、だから支援が受けられないということについてです。それはDV被害者が被害者だと認められないことに似ているように思います。そうした中で、当事者になっていくためにできることとして、DVの支援者は仲間が助け合っているグループの中で支援を受けた先に行く先輩たちが体験を語る場に行っている実践があります。ホームレスはそうしたつながりをつくっていく可能性はないのでしょうか」という質問です。

**清野**：まさしく先行く仲間とか先行く先輩という言葉は依存症の中の自助グループの中でも言われることですよ。ただ、ホームレスの方々の問題というのは、先ほどお話したとおり、DVでホームレスになる人、いろんなストレスからアルコールとか薬物で家を失う人、障がいがある人とか、本当に属性がさまざまなので、われわれもいろいろ試してみたんですけども、ホームレス経験だけでつながるというのは実はちょっと難しい部分があります。共通の基盤というのが実はあんまりなかったりする。あと、路上生活者の中でコミュニティーができてたりするんですけども、お互い、場所によるんですけども、結構、実は裏に回ると仲悪かったりする。あいつが仕切っていて頭にくるとか、あいつは

偉そうにしているけど実はケチだとか。

要するに、どこも同じなんですけど、そこでつながるべき属性じゃないんだろうなと思うんです、路上生活というのは。だから、DV の人は共通の体験を語れるけども、ホームレス生活はなかなか自分の境遇はお互いに聞かないっていう不文律があります。

**二文字屋**：路上におけるコミュニケーションにおいても過去のことについては聞かないということは一つのマナーとして共有されているというのはとても大きいですね。ありがとうございました。

時間も残りわずかなので、これを最後の質問にしたいと思います。「私は、浅草で働いている時、キリスト教会が炊き出しなどをしているのを地域の方たちが嫌がっているのを知りました。炊き出しをするとホームレスが増え、治安の悪化につながるとの考えからです。そのような点で、清野さんは、地域住民、池袋の豊島区の方たちから苦情が出たことはありますか。また、そのときの解決方法を教えていただければ幸いです」という質問です。

**清野**：まさしくそれが二文字屋先生ご専門の Not In My Back Yard、NIBMY の問題ですね。2009 年に、私たちは、前に炊き出しをやっていた公園を実質追い出されました。地域住民からの苦情です。あいつらが炊き出しやるからホームレスが集まって商店街は人が来なくなる、公園で子どもが遊べなくなるということで追い出されました。

区との交渉を続けて、その辺はうちの 2009 年ごろのブログに詳しく書いてあるので、もしご興味があれば時間があれば見ていただきたいんですけども、結果としては、その公園は工事が入って使えなくなったので諦めて、どうにか摩擦の少ない公園を見つけて、そこを理解してくれる町会長さんとも当たりを付けて、今のサンシャインの隣の公園で 11 年目になりますかね、炊き出しをやっています。

苦情は、そういうことを考える人たちが実際にいて、それに対して闘うよりは、私たちは軟弱者なので、妥協の道を探るということで、サンシャイン 60 にも隣のプリンスホテルにも遠慮しながら炊き出しを行って、なるべくそこに迷惑を掛けないようにする。でも、言わなきゃいけないことはちゃんと言うという態度でやってきました。

なので、本当に交渉と話し合いと妥協、その連続でもってやっていて、団体によっては、そういうのは、全部、差別だ、不当だといって闘うところもありますけども、私たちはとにかく炊き出しを継続して、当事者の利益になるようにその維持を優先する、そして、そのことがひいては社会全体の利益になると考えて続けるということをやっています。

浅草のある教会もひどい目に遭いました、あの頃。地域から本当にパージされて、クレーマーみたいな方々に、本当に牧師さんが鬱になるんじゃないかっていうくらいのこともありましたけども、そこはこういった活動をやっていく上では避けて通れない問題なので、一人一人の力量が試されていると思います。

**二文字屋**：あと、地域の理解っていうのもとても大きいと思います。先ほど清野さんがおっしゃった NIMBY、Not In My Back Yard、つまり「うちの裏庭にはお断り」というやつですけども、これはホームレスにかかわらず、例えば、少し前にあった青山での児童相談所の建設計画に対して住民が反対したとか、その施設とか活動の重要性であるとか必要性は分かっているんだけども、うちの近くにはお断りだ、うちの近くではそういうのやめてくれっていうものですね。

これはホームレスに限らずいろんなところでも起きている現象です。そういったものに対する理解っていうのも、住民側の横の連携だったりとか対話の場っていうのがどれだけあるかにかかっています。また、正しい知識がどれだけあるかということが私たちに求められているということでもあると思います。

**清野**：顔が見える関係っていうのは大事ですね。

**二文字屋**：そうですね。

**清野**：どんなやつらが来るか分かんないから怖いというのは誰でも持つので、ちゃんと顔出ししてあいさつをして、あの人たちがやっているんだったら何か問題があってもあの人に言えばいいだろうと。そういったような信頼を勝ち取るっていうことは努力が必要です。

**二文字屋**：その点でいうと、先ほど清野さんがおっしゃっていた、一部、今、登録制でボランティアを受け入れているということですけども、先ほど吐露していた交流という側面が失われてしまったということも大きいと思います。

私も、今回、コロナで今年度行けなかったですが、ホームレス問題を扱う授業で履修生に必ず一度は TENOHASI さんの炊き出し支援とか夜回りに参加させてもらっています。多くの学生が、百聞は一見にしかずといいますか、行くと、こういった方たちがいるんだということで、いろんな意味で衝撃を受けて帰ってきます。

これほど大規模な社会ではありますが、そうだからこそ、顔が見える関係は逆に意図して自らつくり出していかなきゃいけないような状況にあるんだと思います。もちろん、それはホームレスだけじゃなくて、いろんな社会問題、あるいは社会的弱者と呼ばれる方たちもいますけども、そういった方たちとどう共に歩んでいくかということに共通する問題点なのかなと思います。

もう終わりとなりますが、先ほど清野さんの話から、本当に私自身もたくさん勉強させていただいたんですが、単にコロナをしのげばいいというわけではないというのは非常に印象に残ったことの一つです。やはり短期、中期、長期で、いろんなアプローチでそれぞれの立場からできることとできないことも踏まえて考えていかなければ、ホームレス問題、あるいは、そこからもっと広がるコロナでの失業であるとか社会の脆弱性の問題っていう



ものにもなかなか対抗できないんだろうなと思います。

すっきりとした、これだという解決方法はなかなか見いだせない、そもそもそんなものがあれば既に解決されている問題なのかなと思いますが、だからこそ、私たち一人一人が考え、また誰かと共有して、それを時と場合に応じて実践していくというようなきっかけに今回の話がなればいいかなと思っています。

では、時間が来ましたので、これで終わりたいと思います。参加してくださった方々、大変ありがとうございました。また何かいろいろありましたら個別にご連絡いただければと思います。そして清野さん、貴重なお話、ありがとうございました。

**清野**：皆さんも、こんな話にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。ぜひとも、お互いに考えて、ちょっとでもこの社会をいい方向に持っていけるようにお互い頑張っていきましょう。どうもありがとうございました。

当サイトの内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を禁じます。